

中学校における和歌教材の現状と課題

—— 教科書掲載の『新古今和歌集』入集歌の検討を通して ——

木村 澄子

1. 本稿の目的

『新古今和歌集』（以下『新古今集』とする）は、中学校では3年次の国語の教科書において、『万葉集』、『古今和歌集』（以下『古今集』とする）とともに、三大歌集としての配置が見られる。しかし、実際に掲載されている和歌数は3・4首に過ぎない。配当時数も少なく、例えば令和3年光村図書発行の教科書においては、三大歌集の掲載和歌全15首と『古今集』仮名序の冒頭部分の学習を合わせて僅か3時間である。しかし、教師用指導書や教師用指導書別冊には、「歴史的背景を踏まえて情景をイメージする」「さまざまな表現技法があることにも注意を払い¹」や、「作風の違いに気づかせる指導を²」等の文言が見られる。限られた時数で限られた和歌のみを学んでいる現状において、これらについて生徒に理解を促すことは困難である。

教科書出版社も様々な対応策を講じており、例えば表現技法の解説を掲載したり、東京書籍が教科書後半の資料編に、詠まれた時代の異なる三首の和歌について、使われている表現技法に注目しながら解説している文章を掲載したり、教育出版が各歌集の特徴を平明な表現で解説した文章を掲載したりしている。ところが、光村図書に関しては、「掛詞」を表現技法の解説には取り上げているものの、実際に「掛詞」が使われている和歌は掲載しておらず、教科書以外の和歌の持ち込みが前提となっているようである。配当時数を考えて、持ち込みなどせずに解説を読むだけで済ませることもできるのかもしれない。しかし、中学3年生といえは多くの生徒が高校入試を控えており、新潟県の公立高等学校入学者選抜試験においては、平成24年度から令和3年度までの過去10年間で7回も和歌に関する出題があったことや、平成27年度から令和2年度までの6年間で4回も「掛詞」に関する出題があったことを踏まえると、表現技法を含め、和歌の学習を丁寧に扱う必要があると考える。

さらに、中央教育審議会答申では、「我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である。」としている³。

では、限られた配当時数の中で、我が国の言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育成し、さらに、生徒が直面する高校入試に対応できるようにするためには、中学校では何をどう扱うべきであろうか。この問題に取り組むためのベースとして、本稿では中学校の和歌教材の現状と課題を明らかにしたい。

2. 中学校における和歌学習の目標及び内容

2.1. 学習指導要領上の古典の扱い

平成28年12月の中央教育審議会答申において、「我が国の言語文化に親しみ、愛

情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である。」とされた⁴ことを受けて、平成 29 年告示の中学校学習指導要領では、それまでの「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」及び読書に該当する、「伝統的な言語文化」「言葉の由来や変化」「書写」「読書」に関する指導事項を、〔知識及び技能〕の(3)「我が国の言語文化に関する事項」として整理し、内容の改善を図っている⁵。

このうち、第3学年の「伝統的な言語文化」の内容は、「ア 歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと。」「イ 長く親しまれている言葉や古典の一節を引用するなどして使うこと。」である⁶。

「ア」について学習指導要領解説では、「歴史的背景」とは「背景となる歴史的な状況」「舞台となっている時代の様子や作者が置かれていた状況」であるとし、歴史的背景を踏まえることによって「作品の世界をより深く、広く理解することが可能になる。」「作品の世界をより実感的、具体的に捉えることもできる。」としている。ただし、「歴史的背景については、作品の理解に役立つ事柄を精選して取り上げるようにすることが必要である」とも述べている⁷。同解説には「ア」の「古典を読むこと」について、「各学年のアは、音読するなどして我が国の伝統的な言語文化の世界に親しむことを系統的に示している。」とあり⁸、「読む」とは、「音読」を代表としていることがわかる。「ア」の「その世界に親しむこと」についての解説は見られない。

「イ」については、「我が国の言語文化であることわざや慣用句、古典などに一層親しむ態度を育てるとともに、我が国の伝統や文化についての関心を深め、これを継承・発展させようとする態度の育成につながる。」とあり、「古典の一節を引用する」活動の例として、「例えば、その言葉や一節を基に感想文や作品を紹介する文章を書くこと、スピーチをすること、手紙を書くこと、座右の銘を書くことなどが考えられる。」と述べている⁹。

「ア」と「イ」には、前掲の中央教育審議会答申の内容を受けて、現代を生きる生徒に、自分とはかけ離れた遠い時代の話や文化としてではなく、実際に生きていた人たちの営みとして、また、現代の生活やものの見方・考え方にも繋がっているものとして、古典に触れてほしいという思いが込められている。

2.2. 教科書に掲げられている学習目標・学習内容

ここでは、学習指導要領の内容が中学校国語の教科書にどのように反映されているのかを、実際の中学校国語3学年教科書で調査し、そこから見えてきた授業実践上の課題について述べたい。

2.1 で見た「歴史的背景の把握」「音読」「その世界に親しむ」「古典の一節を引用する」の4点と、各教科書出版社が令和3年に発行した（学校図書は平成28年発行）教科書で掲げている学習目標及び学習活動とを照らし合わせたのが、次の表1である。

表1から、5社すべてが「歴史的背景の把握」と「音読」とを学習目標と学習活動、またはそのいずれかに掲げていることがわかる。「歴史的背景」は、東京書籍・学校図書・三省堂の表記では「和歌が詠まれた背景」と表現されているが、2.1 で確認した学習指導要領解説の文言から、この3社の目標及び活動も「歴史的背景の把握」に

表 1 学習指導要領に関する中学校第 3 学年国語教科書の学習目標及び学習活動

		歴史的背景の把握	音読	その世界に親しむ	古典の一節を引用する
光村図書	学習目標	※ 1 ○		○	
	学習活動		○		○鑑賞文
東京書籍	学習目標	○	○	○	○鑑賞文
	学習活動	※ 2 (○)	○		○
教育出版	学習目標	○	(○)		
	学習活動	○	○		
三省堂	学習目標	○			
	学習活動	○	○		○鑑賞文
※ 3 学校図書	学習目標	○	○		
	学習活動	○	○		○解説文

※ 1 ○は、該当の記載があることを示す。他表も同じ。

※ 2 (○) は、明記はないが関連の記載が見られることを示す。他表も同じ。

※ 3 学校図書は平成 28 年発行教科書。他表も同じ。

該当すると判断した。鑑賞文や解説文など、「古典の一節を引用する」に関する目標や活動を掲げているのは、光村図書・東京書籍・三省堂・学校図書の 4 社である。

この三つの内容をほとんどの教科書出版社が取り上げている理由として、それぞれ以下のようなことが考えられる。

「歴史的背景の把握」に関する目標を掲げるのは、学んでいる対象が古典だからに他ならないであろう。古典の内容を理解するためには、当時の文化や社会の状況、作者の状況を知ることが不可欠である。それらなくして、情景や心情を適切に捉えることは困難だからである。また、三大歌集として学ぶ上で、それぞれの歌集が抱えている背景を知るとは、歌集それぞれに異なる価値を見出すことにも繋がる。

二つ目の「音読」を行うのは、和歌が韻文だからという理由はもちろんだが、ここでは、古典の学習において小・中・高等学校のすべての学習指導要領に示されている活動である点に注目したい。特に、古典への入門期である小学校で音読に力を入れているのは、音としてリズムを覚え、覚えることで古典に親しむ目的があるように思う。その経験を受けて、中学校ではなぜそのようなリズムが生まれるのかを、意味や「係り結び」、句切れなどから学び、古人の工夫を知る。それは、古典の内容理解の入門期である中学校において、「愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成する¹⁰⁾」という中央教育審議会答申の文言を具体化した学習内容となるだろう。「古典の一節を引用する」という内容に取り組む教科書出版社が多い理由も、まさにこの中央教育審議会答申の文言の具体化にあると言えるだろう。

学習指導要領に掲げられている内容はもう一つある。「その世界に親しむ」である。この目標を掲げているのは、光村図書・東京書籍の 2 社である。この 2 社以外の教科

書に明記されていない理由は、その曖昧さにあると言えよう。曖昧であるが故にそのアプローチ方法として様々なものが考えられ、見方によっては掲げられている目標や活動のすべてが「親しむ」ことに繋がっていると言える。つまり、他の3社も明記していないだけで、「親しむ」ための目標や活動を含んでいると考えられるのである。

ここまでは、学習指導要領の内容と直接的に関わりのある目標や活動について見てきたが、教科書には他にも様々な目標や活動が示されている。そこで、次は「歴史的背景の把握」「音読」「その世界に親しむ」「古典の一節を引用する」以外の内容に目を向けてみたい。そこから、学習指導要領の内容と直接的には関わらずとも、教科書出版社の多くが重要だと考えている学習内容が見えてくると予測し、それが明らかになれば、中学校で取り上げるべき学習内容の重点項目が見えてくるのではないかと考える。学習指導要領の内容以外で、各社が掲げている学習目標と学習活動についてまとめたのが表2である。

表2 表1以外の中学校第3学年国語教科書の学習目標及び学習活動

		表現技法の 理解	句切れ・リズム の把握	心情 理解	情景 理解	歌集の 比較	その他
光村図書	目標	○ 効果を考える		○	○		
	活動	○	※1 〈○〉	○	○	○	・和歌の世界を味わう
東京書籍	目標	○		○	(○)		
	活動	○	〈○〉	(○)	○	※2 [○]	
教育出版	目標	○	〈○〉				・古人のものの見方や 考え方を話し合う
	活動		〈○〉	○			・調べ学習 ・自然や人間に対する作 者の思いを話し合う
三省堂	目標	○ 効果の理解		○	○		
	活動	○	○	○	○	○	
学校図書	目標		○	○	○		
	活動	○	○	○	○		

※1 〈○〉は、二つの内容（「句切れ」「リズム」）のうち片方の明記がないことを示す。

※2 [○]は、三大歌集とは別に、該当する教材が教科書にあることを示す。

学習指導要領の内容以外で5社の掲載率が高い学習内容は、「表現技法の理解」「句切れ・リズムの把握」「心情理解」「情景理解」である。

「表現技法の理解」の掲載率が高い理由としてまず考えられるのは、和歌の意味や内容を理解するためには現代語訳が必要であり、表現技法が使われている和歌の現代

語訳は、その表現技法を踏まえて行われるものだから、という理由である。さらに、三省堂の教科書中に「(『古今和歌集』は) 比喻や見立てなどが多用され、理知的な歌風で知られる。」「(『新古今和歌集』は) 体言止めなどさまざまな技巧が工夫され、余情に富む表現に特徴がある。」とあるように、「表現技法の理解」は各歌集の特徴の理解にも繋がる。東京書籍も教師用指導書で、「『古今和歌集』では、掛詞や縁語、見立て、擬人法といった、新しい表現技法を用いた理知的で観念的な歌が詠まれた。」「(『新古今和歌集』では、) これまでに比べ、より感覚的、象徴的な歌が多くなり、妖艶で余情美を追求する傾向が強まる。歌の最後を体言(名詞)で終わらせる体言止めや、初句切れ、三句切れといった技法も、余韻を表現するのに効果的な方法として多用された。」と解説している¹¹。具体的な表現技法としては、光村図書・教育出版・東京書籍が「枕詞」「序詞」「掛詞」、三省堂はその三つに加えて「縁語」「沓冠」、学校図書は「体言止め」を掲載する。

「句切れ・リズムの把握」は先ほども述べたように、小学校で慣れ親しんだ音読のリズムに理由を与える項目である。言葉や意味のまとまり、句切れという概念を学び、五七調・七五調といったリズムを知ること、なぜそのような読み方になるのかを把握することができるのである。小中連携の観点から見て、重要な学習内容だと言える。また、韻文であるというだけでなく、和歌が歌合において音声で伝達されていたという文化的側面から見ても、和歌の学習にとっては特に、句切れやリズムを意識して音読することが重要であると言える。

「心情理解」と「情景理解」は、和歌の内容を具体的にイメージしたり、豊かにイメージを広げたりする上で必要な要素である。この、具体的なイメージやイメージの広がりがないと、生徒にとって和歌は自分とはかけ離れた遠い時代の話や文化でしかなく、実際に生きていた人たちの営みとして捉えられない。ましてや、現代の生活やものの見方・考え方にも繋がっているものという捉えにはなり得ない。そのため、目標や活動に掲げるのは当然であり、掲げずとも必ず授業の中で扱っている内容である。

つまり、「表現技法の理解」は内容理解と各歌集の特徴理解という観点から、「句切れ・リズムの把握」は小中連携と和歌の文化的側面から、「心情理解」と「情景理解」は内容理解と文化の継承の観点から重要な内容であるため、掲載率が高いと考える。いずれも、和歌の学習に価値や豊かさを加えることができる内容である。

次節では、これらの目標や活動が設定された上で、どのような和歌が選ばれ、教科書に掲載されているのかを見ていく。

3. 中学校教科書掲載和歌の分析

3.1. 教科書掲載和歌の実態

各教科書会社が令和3年に発行した(学校図書は平成28年発行)教科書に掲載されている『新古今集』の和歌と作者をまとめたのが、表3である。

最も掲載が多い和歌は、式子内親王の「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする」である。光村図書の教師用指導書の解説を見ると、この和歌の詠みぶりの工夫や歌の背景を学べる点に価値を見い出している様子が窺える¹²。また、

表3 中学校第3学年教科書掲載の『新古今集』和歌及び作者

教科書掲載和歌	光村	東書	教出	三省堂	学図
道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ	○	○			
見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮	○			○	
玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶことの弱りもぞする	○	○	○	○	
駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮					○
思ひあまりそなたの空をながむれば霞を分けて春雨ぞ降る					○
夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしの声					○
心なき身にもあはれは知られけり鴨立つ沢の秋の夕暮			○		○
春の夜の夢の浮橋とだえて峰に別るる横雲の空		○	○		
寂しさはその色としもなかりけり楨立つ山の秋の夕暮		○			
風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな				○	

〈教科書出版社名の表記〉

光村：光村図書

東書：東京書籍

教出：教育出版

三省堂：三省堂出版

学図：学校図書

作 者	光村	東書	教出	三省堂	学図
西行法師	○	○	○	○	○
藤原定家	○	○	○	○	○
式子内親王	○	○	○	○	○
藤原俊成					○
寂蓮法師		○			

式子内親王の和歌は『新古今集』に49首入集しており、女流歌人としては最多であったことから、新古今時代の代表的歌人として教科書に採択された可能性も高い。

掲載理由が作者にある可能性を探るために、平成2年以降の教科書に掲載されている和歌と作者をまとめたのが、次の表4である。掲載されている和歌には変遷があるものの、作者には大きな変化がない。掲載理由の大きな一因が作者にあることは明らかである。すべての教科書で継続的に掲載が見られる西行法師は、『新古今集』入集歌数最多の歌人であり、藤原定家は『新古今集』編纂の中心的な存在であるとともに、象徴的と言われるこの歌集の歌風を大成した人物でもある。

他の要因としては、後に学習する文学作品や他の文学作品との関連を挙げることができる。例えば光村図書の教師用指導書には、後に学習する『おくのほそ道』において、松尾芭蕉の敬愛する「古人」の一人として西行法師が再登場することを見据えて、「その漂泊の人生について、簡単に紹介しておきたい。」とあり、また、観世信光作の謡曲「遊行柳」で西行法師が「道のべに……」の和歌を詠んだと設定されている蘆野の里に、『おくのほそ道』の旅で松尾芭蕉が立ち寄り、「田一枚植えて立ち去る柳かな」の句を詠んだという解説も添えられている¹³。藤原定家の「春の夜の……」については教育出版が教科書中で、「夢の浮橋」の語について、「『源氏物語』の巻の名前でもあり、読む者を『源氏物語』の世界へいざないもします。」と述べ、他の文学作品との関わりを解説している。同様の解説は東京書籍の教師用指導書にも見られる¹⁴。『源

表 4 平成 2 年以降発行の中学校第 3 学年教科書掲載『新古今集』和歌と作者及び掲載年

教科書掲載和歌	光村	東書	教出	三省堂	学図
道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ	2~R3	2~R3	9~24	14~24	
見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮	2・14~R3		2・5・18	28・R3	
玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする	14~R3	24~R3	9~R3	2~R3	
花さそふ比良の山風吹きにけりこぎ行く舟の跡見ゆるまで	5~18			24	
桐の葉も踏み分けがたくなりにけりかならず人を待つとなければ	5~9				
駒とめて袖うちらはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮	5~9	2~18	9・14・ 24・28	14~24	9・ 18~28
山深み春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水	2	2~18	2		2~18
由良の門を渡る舟人かちをたえゆくへも知らぬ恋の道かな				2~9	
永らへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき				9	
難波潟短き葦のふしのまも会はこの世を過ぐしてよとや				2・5	
吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん			2・5		
思ひあまりそなたの空をながむれば霞を分けて春雨ぞ降る					24・28
夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしの声					24・28
心なき身にもあはれは知られけり鴨立つ沢の秋の夕暮			28・R3		5~28
昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山ほととぎす					18
なびかじな海人の藻塩火焚き初めて煙は空にくよりわぶとも					14
またや見ん交野のみ野の桜狩花の雪散る春のあけぼの					14
大空は梅のにはほひにかすみつつ曇りもはてぬ春の夜の月					2・5
ほのぼのと春こそ空に来にけらし天の香具山霞たなびく					2
春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るる横雲の空		24~R3	R3		
寂しさはその色としもなかりけり楨立つ山の秋の夕暮		24~R3			
風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな				28・R3	

(教科書発行年)

光村図書：H2・5・9・14・18・24・28・R3

東京書籍：H2・5・9・14・18・24・28・R3

教育出版：H2・5・9・14・18・24・28・R3

※ 5~9 年は「愛」「自然」などテーマ別掲載

三省堂：H2・5・9・14・18・24・28・R3

※ 2~9 年は「百人一首」から掲載

学校図書：H2・5・9・14・18・24・28

歌 人	光村	東書	教出	三省堂	学図
西行法師	2~R3	2~R3	2~R3	14~R3	5~28
藤原定家	2~R3	2~R3	2~R3	14~R3	2~28
式子内親王	2~R3	2~R3	2・9~R3	2~R3	2~28
宮内卿	5~18			24	
曾禰好忠				2~9	
藤原清輔				9	
伊勢				2・5	
藤原俊成					14~28
後鳥羽上皇					2
寂蓮法師		24~R3			

氏物語』との関わりは、「見わたせば……」についても光村図書の教師用指導書に解説されている¹⁵。

3.2. 学習目標及び学習活動と教科書掲載和歌との整合性

3.1 から、和歌の表現の工夫や内容、作者、後の学習との関連や他の文学作品との関連等の様々な理由から、教科書に掲載する和歌が選ばれている可能性が見えてきた。しかし、これほど多彩な理由によって採択されている3ないし4首の和歌は、掲げられている学習目標や学習活動と照らし合わせた時、それを達成するに十分な資料たり得るのか。ここまでは、中学校の教科書に示されている学習目標や学習活動、掲載和歌及び作者の傾向について見てきた。さらにここからは、もう一つの観点から中学校における和歌学習の内容を確認したい。

もう一つの観点とは、教師用指導書の各単元の最初に示されている「単元のねらい」や「教材提出の意図」である。これらは、「この単元で何を学ばせたいか」「どんな力を育てたいか」「どういう意図をもってこの単元にこの教材を掲載するのか」など、いわばその単元の核となる内容が書かれた項目である。そのため、この項目の内容を確認することで、重点指導事項を明らかにすることができると考える。それが明らかになれば、学習内容の軽重も見えてきて、目標や活動の設定に役立つはずである。

今回の調査で対象としたのは、光村図書及び東京書籍の中学3年生用国語の教師用指導書である¹⁶。それぞれに書かれている和歌学習の「単元のねらい」と「教材提出の意図」の内容をまとめたのが、次の表5である。なお、「古人のものの見方・感じ方を捉える」には「心情理解」「情景理解」「状況理解（「歴史的背景の把握」も含む）」が、「リズム・調べを味わう」には「音読」「句切れの把握」が含まれている。

表5 中学校における教師用指導書掲載の和歌学習のねらい

		リズム・調べ を味わう	古人のものの見方・ 感じ方を捉える	歌集の特徴を 理解する	表現の豊かさ・ 表現技法の理解
中 学	光村図書	○	(○)		○
	東京書籍	○	○	(○)	○

次に、教科書に掲載されている僅か3・4首の和歌で、上記のねらいや2.2 で見てきた学習内容のすべてを網羅できるのかを確認していく。

2.2 で確認した中学校の学習内容は、「歴史的背景の把握」「音読」「その世界に親しむ」「古典の一節を引用する」「表現技法の理解」「句切れ・リズムの把握」「心情理解」「情景理解」「歌集の比較（歌集の特徴把握）」の9項目であった。このうちの「音読」「その世界に親しむ」「古典の一節を引用する」は、個別の和歌を対象としていないため、今回の調査では取り上げないこととする。それ以外の6項目と表5の項目とを合わせて整理すると、今回着目する学習内容は、「心情理解」「情景理解」「状況理解（「歴史的背景の把握」も含む）」「句切れ・リズムの把握」「表現の豊かさ・表現技法の理解」「歌集の比較（歌集の特徴把握）」の6項目となる。それぞれの和歌に関する教師用指導書の解説に、6項目の学習内容に関する記載が見られるかどうかをまと

めたのが、表6である。なお、和歌の表記はそれぞれの教科書に従った。

表6 教科書掲載和歌の学習内容への対応の有無

〈光村図書〉

	心情理解	情景理解	状況理解 (歴史的背 景の把握)	句切れ・リ ズムの把握	表現の豊かさ ・表現技法の 理解	歌集の比較 (歌集の 特徴把握)
道の辺に清水流るる柳かげしば しとてこそ立ちどまりつれ	○	○		○ 三句切れ	○	○
見わたせば花も紅葉もなかりけ り浦の苫屋の秋の夕暮	○	○		○ 三句切れ	○	○
玉の緒よ絶えなば絶えねながら へば忍ぶることの弱りもぞする	○		○	○ 初・二句切れ	○	

〈東京書籍〉

	心情理解	情景理解	状況理解 (歴史的背 景の把握)	句切れ・リ ズムの把握	表現の豊かさ ・表現技法の 理解	歌集の比較 (歌集の 特徴把握)
春の夜の夢のうき橋とだえして 峰にわかるる横雲の空		○		句切れなし	○	○
道の辺に清水流るる柳かげしば しとてこそ立ちどまりつれ	○	○		○ 三句切れ	○	
さびしさはその色としもなかり けり真木たつ山の秋の夕暮	○	○		○ 三句切れ	○	
玉の緒よ絶えなば絶えねながら へば忍ぶることの弱りもぞする	○		○	○ 二句切れ	○	

表6を作成するに当たり、他社の教師用指導書に記載があっても、当該のものに記載がない場合は「該当項目なし」とした。その結果、東京書籍の「道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ」の該当項目数は、光村図書のものより少なくなっている。表6を見ると、中学校の教科書掲載和歌と教師用指導書の解説だけでは、特に「歴史的背景の把握」を含む「状況理解」と、「歌集の比較」について、十分なねらいの達成は望めないことがわかる。

表6の光村図書を見てみると、「歌集の比較」に該当する和歌は3首中2首掲載されており、一見、教科書掲載和歌から「歌集の特徴」の一端をつかむことができるように見える。しかし、教師用指導書の解説にある「『新古今和歌集』は『しばしとてこそ立ちどま』ったけれど、しばしではなく時を過ごしてしまった、ということと言葉としては表さず、『花も紅葉も』ない『浦の苫屋の秋の夕暮』がどんな感情を呼び起こしたかも表現しない。このように余情に訴える点が新古今らしいといえよう。」という指摘¹⁷⁾と、教科書の『新古今集』の解説にある「自然美や繊細な感情を、象徴

的に表現している歌が多い。」という歌集の特徴とが合致しているかは疑問である。また、光村図書掲載の西行法師の和歌からは、確かに「余情に訴える」という点は捉えられるかもしれない。しかし、光村図書が教科書に記す『新古今集』の解説と照らし合わせながら、和歌入門期の中学生が、この和歌から「新古今らしい」という大きな捉えにまでたどり着けるであろうか。『新古今集』に関して言えば、光村図書もやはり、「歌集の特徴」をつかむことと、それを「歌集の比較」に繋げることは、掲載和歌だけでは難しいのではないだろうか。

次の節では光村図書を対象として、これらの疑問も含めて中学校の教科書が抱えている和歌学習の課題を明らかにする¹⁸。

4. 中学校における和歌指導の課題

4.1. 教科書が抱える課題

平成14年4月からの週休2日制完全実施によって、中学校第3学年の国語の授業時間は140時間から105時間に減少した。それに伴って、和歌の学習に当てられている配当時間も減少し、例えば光村図書ではそれまでは4～6時間だったが、平成18年発行教科書以降は3時間の設定が定着している。さらに、掲載されている和歌の数も『古今集』『新古今集』共にそれぞれ4首だったものが、平成24年発行の教科書からは、3首に減少した。

このような縮小傾向があるにも関わらず、中学校の和歌に関する学習内容は決して少なくないことや、掲載和歌だけではねらいや目標を十分に達成できないことを、第2節・第3節で確認した。その中でも、特に光村図書の和歌学習は、目標と活動の繋がりが不明瞭であることに加え、活動内容が盛りだくさんであるという感が否めない。そう感じさせる理由を、表7で確認したい。

表7は、光村図書と東京書籍の中学校教師用指導書の「教材提出の意図」（表5）と、中学校教科書に掲載されている学習目標及び学習活動（表1・2）、そして、学習内容に関する教科書掲載和歌の有無（表6）をまとめたものである。「その他」の光村図書の学習活動の内容は、「和歌の世界を味わう」である。「教材提出の意図」にはあっても学習目標には見られない項目や、学習活動には見られるが学習目標には記載がない項目等は空欄になっている。「その世界に親しむ」は、曖昧かつすべての目標や活動が集約されているような項目なので除いたとしても、光村図書は空欄が6項目もある（表7の□で囲んだ項目を指す）。東京書籍が3項目であることを考えるとかなりの数であり、「目標と活動の繋がりが不明瞭」と言わざるを得ない。それにもかかわらず、教師用指導書別冊である『指導に役立つ古典のポイント』には、「万葉・古今・新古今の歌集ごとの特徴は、単に知識として与えるのではなく、このような一つ一つの作品を通して、生徒に実感させていきたい。」とあり¹⁹、さらに高い目標が設定されている。活動内容が盛りだくさんであると感じるのは、目標と活動の一貫性のなさだけではなく、こうした高い目標設定によるものでもある。

表7 光村図書と東京書籍発行の中学校教科書における和歌の学習内容の比較

		古人のものの見方・感じ方を捉える			リズム・調べを味わう		表現の豊かさ	その世界に親しむ	古典の一節を引用する	歌集の比較(歌集の特徴把握)	その他
		心情理解	情景理解	状況理解(歴史的背景の把握)	音読	句切れ・リズムの把握	・表現技法の理解				
光村図書	教師用指導書	(○)			○		○				
	教科書の目標	○	○	詠まれた状況や歴史的背景			○ 効果を考える	○			
	教科書の活動	○	○		○	(○) 「句切れ」の文言なし	○		○ 鑑賞文	○	○
	該当掲載和歌	○	○	○ 当時の恋愛	○	○	○		○	○	
東京書籍	教師用指導書	○			○		○			(○)	
	教科書の目標	○	(○) 「和歌の意味」	○ 詠まれた背景	○		○	○	○ 鑑賞文		
	教科書の活動	(○) 「和歌の意味」	○	(○) 「和歌の意味」	○	(○) 「句切れ」の文言なし	○		○	[○] 関連教材あり	
	該当掲載和歌	○	○	○ 式子内親王の状況	○	○	○		○	○	

4.2. 課題の原因の考察

ではなぜ、光村図書ではこのような事態が起きているのでしょうか。その原因を、教科書掲載の目標や活動の変遷から明らかにすることを試みる。

光村図書が平成2年に出版した教科書に掲載されている目標は、「和歌に表れている昔の人の心を読み味わう」であった。この頃は、目標が一つだけ掲げられて、その目標についての詳しい説明が添えられていた。平成18年発行教科書は、「和歌に表れた昔の人の思いや情景を読み味わう。」、平成24年は「和歌に表れた昔の人の心情や情景を読み取る。」、令和3年は「作者の心情や描かれた情景を読み取り、表現の効果などについても考える。」という具合に、表現の変化や内容の付け加えがありつつも、平成2年発行教科書の目標は、現在使用されている教科書まで掲載が続いている。また、平成9年発行の教科書では、上記の目標の説明に、「気に入った歌を選んで何度も声に出して読み、言葉の響きやリズムを味わおう。」という文言が加わる。この

音読についての記載は、平成14年には「好きな歌を朗読したり暗唱したりして、言葉の響きやリズムを味わおう。」となり、平成18年からは学習活動の一つとして掲載されるようになった。

「書くこと」に関する目標や活動は、平成14年から掲載が始まった。「好きな課題を選んで取り組もう」という目標が掲げられ、具体的な活動として「歌われている心情や情景、言葉の響き、気に入ったところなどを短い文章にまとめる。」「テーマを決めて歌集を作る。」の二つが挙げられている。平成29年告示の中学校学習指導要領でいうところの、「古典の一節を引用する²⁰」に関する活動である。このうち一つ目の活動は、平成24年から掲載和歌の横に現代語訳が付されるようになったことで、平成28年からは「現代語訳を基に想像してみよう。」という活動に変わる。二つ目の活動は、現在まで掲載が続いている。

上記のとおり、「心情や情景の理解」「音読・言葉の響きやリズムを味わう」「書くこと」に関する目標や活動は継続的に掲載されているため、必ず抑えるべき項目という位置づけであると言える。

他の目標や活動についても見てみる。平成18年から新たに、「和歌の効果的な表現や語句の使い方をとらえる。」という目標が掲げられるようになる。「表現」に関する記載は、平成2年発行教科書の目標の説明に「表現上の特色などに注意しながら、読み味わってみよう。」とあったが、平成5年～14年発行教科書には見られなくなっていた。それが平成18年に再掲載されて以降、文末が「読み味わう」と変わったり、文言が「表現の効果などについて考える。」と変わったりしつつも、令和3年発行の教科書まで掲載が続いている。一度記載されなくなったものが再掲載されるようになったことから、この項目の重要度も高いと言える。

ここまで、光村図書発行の教科書掲載の目標や活動の変遷を見てきたが、令和3年発行の教科書では更に大きな変化があった。「詠まれた状況や歴史的背景を理解し、和歌の世界に親しむ。」という目標が登場し、さらに、学習活動には「三つの歌集の歌を比較して、それぞれの表現について感じたことなどを話し合ってみよう。」という内容が加わったのである。後者の内容自体は、平成28年発行のものに既に、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の歌を比較して、それぞれの表現について感じたことなどを話し合ってみよう。」とあったが、「詠まれた状況や歴史的背景を理解し」という、新たに加えられた文言と合わせて考えると、内容が急に広く、深くなったように思われる。遡ってそれ以前のものを見てみると、平成24年には、『古今和歌集』の歌人たちは、既に仮名文字を自由に使いこなしており、その歌風は『万葉集』に比べて、優美で繊細であった。また、『新古今和歌集』の歌人たちの歌風は、それまでより言葉や技巧にさらに磨きのかかったものになっていった。」という解説が掲載されていた。知識として知っておいてほしい、といった扱いにも見える。それが、解説→学習活動と変化したことから、「三大歌集の比較」の扱いは重要度を増しているように思われる。

以上の内容をまとめたのが、表8である。

表 8 光村図書の学習目標及び学習活動の変遷

	心情・情景 の理解	音読・響きや リズムを味わう	表現・語句 の理解	書くこと (鑑賞文 等)	三大歌集 の比較	状況・歴史的背景 の理解
平成 2 年	○		○			
5 年	○					
9 年	○	○				
14 年	○	○		○		
18 年	○	○	○	○	(○)	
24 年	○	○	○	○	(○)	
28 年	○	○	○	○	○	
令和 3 年	○	○	○	○	○	○

和歌学習への配当時数や教科書掲載和歌数は減少しているにも関わらず、表 8 から学習目標・学習活動は増えていることがわかる。しかも、いずれの目標や活動も、継続して掲載されていたり、再掲載されるようになったり、新たに加わったりしており、結局はそのすべてが軽重なく重視されているように思われるのである。

なぜこのような状況になっているのであろうか。改めて表 8 の項目を見てみると、「和歌に親しむ」というねらいと「知識の習得」というねらいを両立しようとする姿勢が、原因としてあるように思う。項目のうち、「音読」と「書くこと」は、「和歌に親しむ」というねらいに、また、「心情・情景の理解」「表現・語句の理解」「三大歌集の比較」「状況・歴史的背景の理解」は、「知識の習得」というねらいに関わる項目であろう。「親しむ」ために必要な要件が「知識の習得」であり、この二つのねらいは和歌の学習に限らず両立が図られていると思われる。しかし、和歌に関してはその「知識」の量が特に多い。しかも、この「知識の習得」は「学力の向上」と密接に関わることから、「親しむ」ためというよりも、多くの生徒が迎える高校入試や、その先の高等学校での学習のための必要要件という意味合いも強くなる。「学力の向上」は、避けて通ることのできない課題である。光村図書の重点指導事項の多さの背景には、学習指導要領の変遷や現場からの現実的なニーズなどを受けて重ねてきた様々な試行錯誤があるのかもしれない。似た状況は、光村図書に限らず中学校の和歌指導全体で起きている可能性がある。

第 5 節では、いずれも重点指導項目として扱われていることがわかった教科書掲載の目標や活動について、少しでも軽重を付けたり、焦点化を図ったりすることができないか、ということを試みる。

5. 重点指導項目の焦点化の試み

それぞれの目標や活動に、少しでも軽重を付けたり、焦点化を図ったりすることができないかを探るために、再び「教材提出の意図」に注目し、その変遷を確認したい。現時点では最新の、令和 3 年発行の「教材提出の意図」を見るだけでなく、数年間

にわたって内容の変遷を確認することで、表8だけでは見えなかった具体的な学習方法や内容が明らかになり、そこからそれぞれの目標や活動の比重の違いが見えてくるのではないかと考えるためである。調査の対象は、入手できた平成5年・14年・18年・24年・28年・令和3年発行のものとした。「教材提出の意図」の内容と配当時数や掲載和歌数などの変遷をまとめたのが、次の表9である。

表9 光村図書『中学校教師用指導書3』『教材提出の意図』等の変遷

	古人のものの見方・ 感じ方を捉える			リズム・調 べを味わう		表現の 豊かさ	その 世界に	古典の 一節を	歌集の 比較	その他
	心情 理解	情景 理解	状況理解 (歴史的背 景の把握)	音読	句切れ ・リズム の把握	・表現 技法 の理解	親しむ	引用 する	(歌集の 特徴 把握)	
平成5年	○	○	○ 歌人の 生活や 時代の 理解	○	○	○ 表現の 美しさ		○		・和歌の価値 ・和歌選出の観点 ・日本人の心・季 節感を捉える →主体的・積極 的な学習へ
平成14年～ 週休2日制完全実施。和歌の配当時数4-6時間(平成5年)が2時間に。										
14年	○	○		○ 音読 ・朗読 ・暗唱			○	○ 鑑賞文	※ △	・和歌の価値 ・歌風の特徴や成 立の背景は補助 的に触れる程度 にすること
平成18年～ 『古今集』仮名序冒頭部分が掲載される。和歌の配当時数3時間に。										
18年		△ おおよその 意味内容の 把握		○ 音読 ・暗唱				○ 鑑賞文 ・ 感想文	△	・歌風は詳細にこ だわらない ・好きな歌と向き合 わせるための活動 で、受身ではない 出会いを目指す ・朗詠を聞く

	古人のものの見方・ 感じ方を捉える			リズム・調 べを味わう		表現の 豊かさ	その 世界に	古典の 一節を	歌集の 比較	その他
	心情 理解	情景 理解	状況理解 (歴史的背 景の把握)	音読	句切れ ・リズム の把握	・表現 技法 の理解	親しむ	引用 する	(歌集の 特徴 把握)	
	平成 24 年～ 教科書に和歌の現代語訳が載るようになる。掲載和歌数 4 首(平成 5～18 年)が 3 首に。									
24 年	○	○		○ 朗読	○	○ 係り結び ・ 体言止め ・倒置法・ 序調など				・印象的なフレーズ や心引かれる表現 から、各自のイメ ージを膨らませる
28 年	○	○		○ 音読	○	○ 係り結び ・枕詞・ 序詞・ 掛詞・ 体言止め ・倒置 など				・印象的なフレーズ や心引かれる表現 から、各自のイメ ージを膨らませる
中学校新学習指導要領（平成 29 年告示）全面実施										
令和 3 年	○	○	○	○ 音読	○	○ 枕詞・ 序詞・ 掛詞・ 体言止め ・倒置 など				・印象的なフレーズ や心引かれる表現 と歌が詠まれた状 況や歴史的背景か ら、各自のイメ ージを膨らませる

※ △は、触れはするがあくまで主眼は他にある。そこに終始しないようにと記載されている項目。

表 8 と表 9 とを比較すると、教師用指導書の内容と教科書の目標・活動との間にずれが見えてくる。例えば、平成 18 年発行教師用指導書の「教材提出の意図」には、表 9 に示したとおり「おおよその意味内容の把握」という文言が使われ²¹、「和歌に親しむ」ことの比重が「知識の習得」より重くなっている印象を受ける。しかし、表 8 を見ると、教科書の目標や活動に「表現・語句の理解」「三大歌集の比較」が加わり、「知識の習得」に関わる内容が多くなっている。また、表 8 では、平成 14 年発行教科書以降、「書くこと」に関わる記載があるが、表 9 は平成 24 年以降の「教材提出の意

図」には「古典の一節を引用する」に関する記載がないことを示している。

これらの中でも特に、平成24年～令和3年の「歌集の比較」に関する記載が、表8にはあって表9には見られない点は大きなずれの一つである。この結果から、まるで「歌集の比較」は触れる程度でよいと言えそうであるが、そう簡単な話ではない。光村図書の教師用指導書別冊である『古典指導の方法』（令和3年発行のものは『指導に役立つ古典のポイント』）には、「歌の鑑賞から作風の違いに気づかせる指導を²²⁾」という教師側の目標が掲げられているためである。この目標は、平成5年～令和3年発行のものまで、例示している和歌や一部の表現こそ違い、継続的に掲載されている。そして、教科書の掲載和歌を例として示し、それら掲載和歌について「万葉・古今・新古今それぞれの自然観や歌いぶりの違いがよく表れている。（中略）また、万葉・古今・新古今の歌集ごとの特徴は、単に知識として与えるのではなく、このような一つ一つの作品を通して、生徒に実感させていきたい。」と述べる²³⁾。触れる程度でよい、という訳にはいかないようであり、「歌集の比較」もやはり時間を割いて取り上げなければならないようである。

以上の結果から、重点指導事項の絞り込みは難しいという結論に至った。

6. 終わりに

本稿では、中学校における和歌の学習が抱える課題について、『新古今集』を中心に検討した。検討の結果、明らかになった点は次の4点である。1点目は、教科書や教師用指導書に示されている目標や活動が多く、しかもそのほとんどが重視されていることである。2点目は、教科書に掲載されている和歌数が少なく、教科書や教師用指導書に掲げられている目標を達成できないことである。3点目は配当時間が少なく、目標や活動のすべてを取り上げることが困難だということである。4点目は、教師用指導書の内容と教科書の目標・活動との間にずれがあることである。

様々な学習目標や学習活動の中でも特に、「歴史的背景の把握を含む、和歌が詠まれた状況の理解」と「歌集の比較」は、中学校教科書の掲載和歌からだけでは、その学習に取り組むことが難しい。

高等学校での実践ではあるが、渡邊（2015）は、それぞれの歌集の歌風理解をねらいとして、三大歌集から「桜」という同一素材を詠み込んだ和歌を数首ずつ選んで提示するという授業を行っている²⁴⁾。渡邊は、持ち込んだ和歌の「個々の和歌の特徴を歌集毎に帰納して、最後に歌集毎の違いを考える授業を行う。」と述べる。和歌の選定に際しては、『万葉集』は『直観的・写実的・素朴』、『古今和歌集』は『理知的・観念的・繊細優美』、『新古今和歌集』は『構成的・幻想的・婉曲余情』など幾らかの表現の違いはあれど、大凡、このような歌風を理解するために、その特徴を帰納しやすい和歌を優先して選んだ」とある。渡邊が同一素材を詠み込んだ歌を持ち込み、比較している点は非常に興味深い。先ほども見たように、光村図書は教科書掲載和歌を、「万葉・古今・新古今それぞれの自然観や歌いぶりの違いがよく表れている。」としている。しかし、東京書籍は高等学校の教師用指導書で、「内容の違いについては、各歌どれも対象が異なっており、内容に違いが出るのが当然であるのだから各集の比較

のしようがないというのが、生徒（あるいは教師も）の率直な感想であろう。」と述べる²⁵。東京書籍が述べるとおり、場所も風物も異なる歌を比較しても、歌集の特徴の違いを感じるのには難しい。ゆえに、「桜」という同一素材の歌を持ち込む渡邊の実践は現実には即していると思われる。しかしながら、『万葉集』から4首、『古今集』から5首、『新古今集』から5首の計14首を持ち込んでいる点に、中学校で同様の実践を行うことの難しさを感じてしまう。

配当可能な授業時数も念頭に置きながら、中学校の和歌指導が抱える課題の解消を目指して、具体的にどのような対応策を講じるのか、次稿で明らかにしたい。

補注

本論文掲載和歌の表記は、光村図書・東京書籍・三省堂他に倣い、『新編日本古典文学全集』（小学館）によった。

- 1) 光村図書 (2021)『中学校国語学習指導書 3 下』p.104 / 2) 光村図書 (2021)『指導に役立つ古典のポイント』p.65
- 3) 中央教育審議会 (2016)「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び 必要な方策等について（答申）」文部科学省 p.129
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（最終閲覧日 2021.12.21）
- 4) 注 3) 同上資料 / 5) 文部科学省 (2018)『中学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版社 p.9
- 6) 文部科学省 (2017)『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）』文部科学省 p.36
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1384661_5_4.pdf（最終閲覧 2021.12.22）
- 7) 注 5) 前掲書 pp.109-110 / 8) 注 5) 前掲書 p.24 / 9) 注 5) 前掲書 p.110 / 10) 注 3) 同上資料
- 11) 東京書籍 (2021)『新しい国語 3』教師用指導書研究編下 p.22, p.24 / 12) 注 2) 前掲書 p.70
- 13) 注 1) 前掲書 p.115 / 14) 注 11) 前掲書 p.32 / 15) 注 1) 前掲書 p.116
- 16) 注 1) 前掲書 pp.104・注 2) 前掲書 pp.65・注 11) 前掲書 p.18 / 17) 注 1) 前掲書 p.105
- 18) なぜ光村図書を対象にするかについては、次の第 4 節で詳述する。 / 19) 注 2) 前掲書 p.65
- 20) 注 6) 同上資料 / 21) 光村図書 (2006)『中学校国語学習指導書 3 下』p.29
- 22) 光村図書『古典指導の方法』(1993)pp.144-145,『古典指導の方法』(2002)pp.150-151,『古典指導の方法』(2006)p.175,『古典指導の方法』(2012)p.189,『古典指導の方法』(2016)p.166,『指導に役立つ古典のポイント』(2021)p.65
- 23) 注 22) 同上資料
- 24) 渡邊寛吾 (2015)「三大歌集の歌風理解のための和歌学習－同一素材を扱う和歌の比較を通して－」『愛知教育 大学附属高等学校研究紀要』第 42 号 pp.1-19
- 25) 東京書籍 (2017)『国語総合（古典編）教師用指導書』p.463

〔付記〕

本稿は、上越教育大学修士論文「中学校における和歌の学習及び授業展開の研究－教科書掲載の『新古今和歌集』入集歌の検討を通して－」を再構成したものである。

（新潟県立直江津中等教育学校教諭 令和 3 年度修了生）